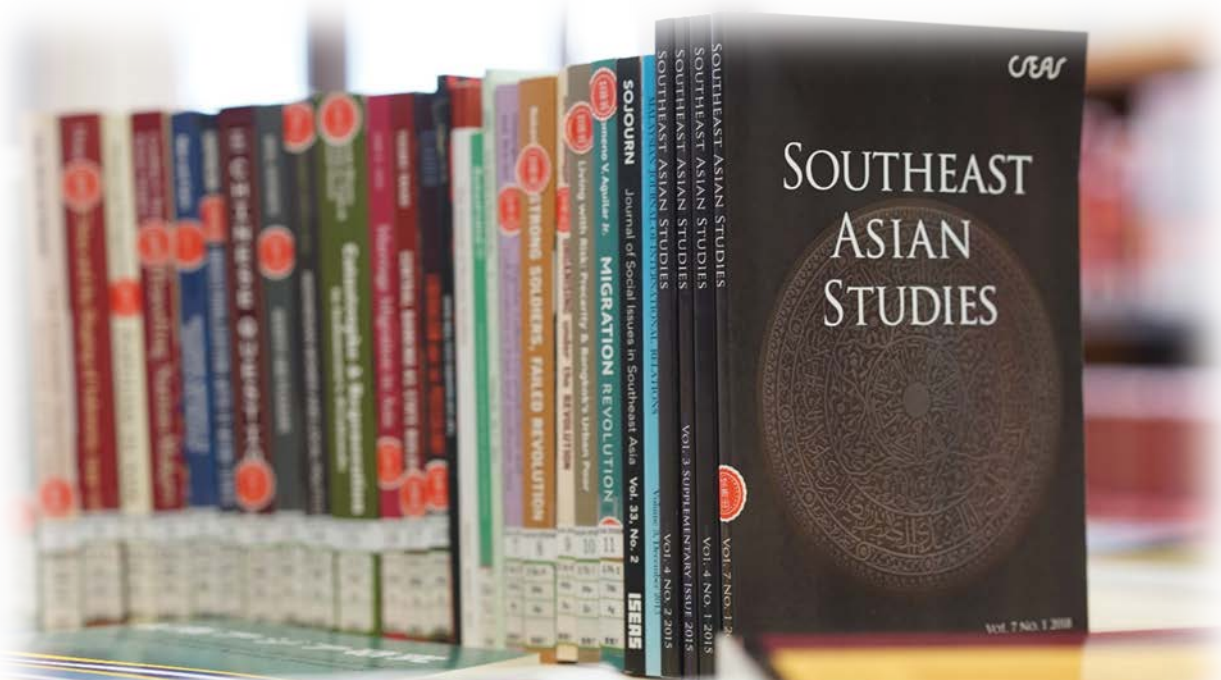


第4回 SPARC Japan セミナー2018  
「人文社会系分野におけるオープンサイエンス ～その課題解決に向けて～」  
2019年1月29日（火）



地域研究分野における学術雑誌の  
デジタル化とオープン化の現在

京都大学東南アジア地域研究研究所  
編集室 設楽成実

# アウトライン

- I 研究所の紹介——地域研究の説明も兼ねて
- II 国内の地域研究分野の学術雑誌の現状——OA化、デジタル化の視点から
- III 海外の地域研究分野の学術雑誌の現状——OA化、デジタル化の視点から
- IV 東南研でのOA出版を選択した際の議論
- V 読者の利便性を考えたOA化に向けて——一つの提案

+ 紀要編集者ネットワークのご案内

# I 東南アジア地域研究研究所

東南アジア及び周辺地域の統合理解をミッションにフィールドベースの学際研究を実施

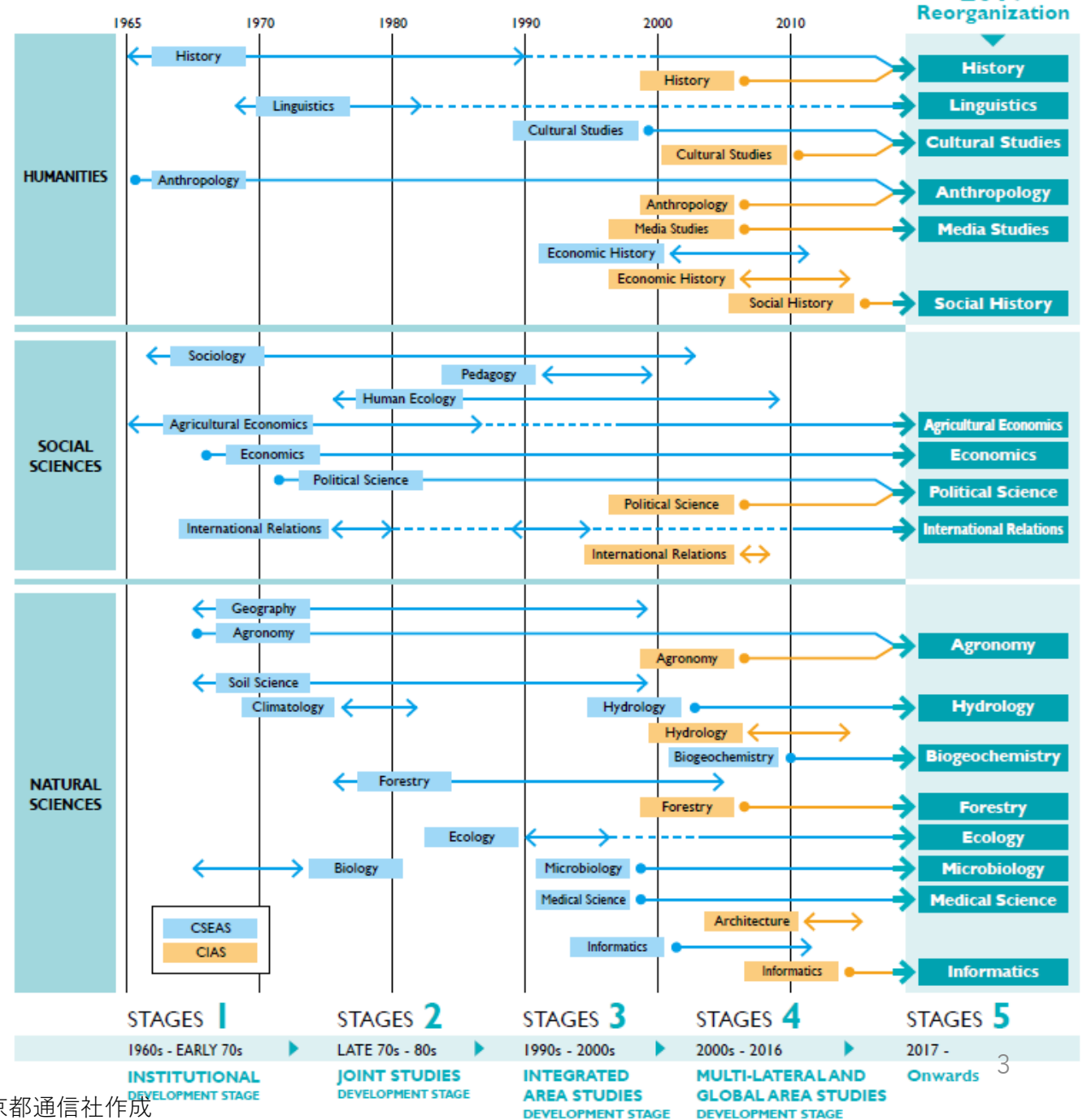
- 分野を超えた研究
- 東南アジアと他地域の比較
- 日本への考察



世界の抱える今日的課題の理解と解決への指針を示す



## Broad Multidisciplinary Approach to Research

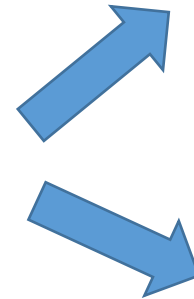
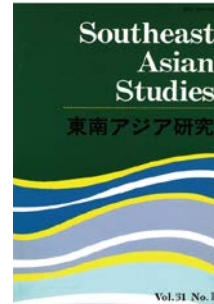
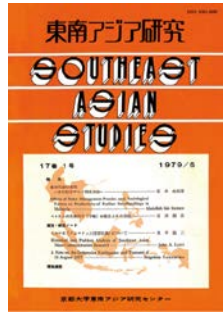


# 出版物

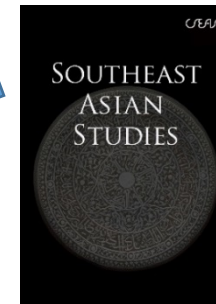
## ● 学術雑誌『東南アジア研究』（1963～） *Southeast Asian Studies*（2012～）



1963年創刊  
 1964年投稿規定を整備  
 1969年レフェリー制度を整備  
 1969年所長報告と彙報を廃止



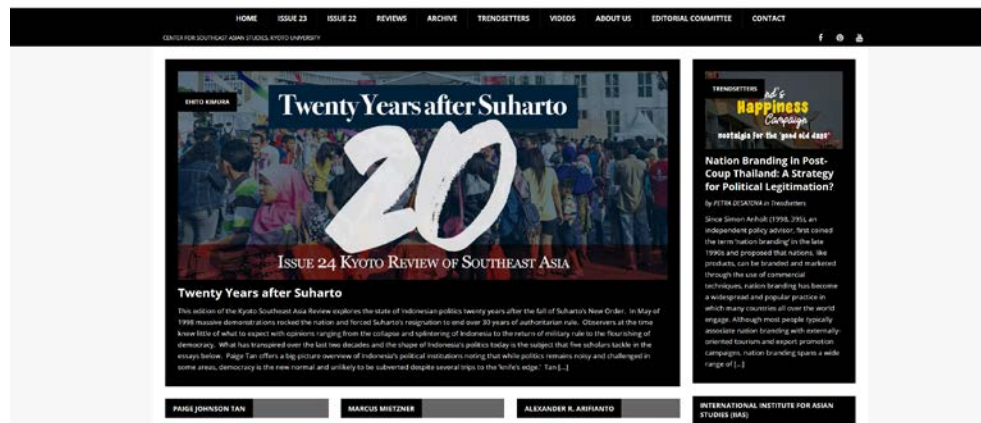
2012年 和文誌として再編



2012年 姉妹誌として英文誌を創刊  
 創刊当初より完全フリーのOA誌として

## ● 多言語オンライン学術雑誌 *Kyoto Review of Southeast Asia* <https://kyotoreview.org/>

**Kyoto Review**  
 of Southeast Asia



2002年 創刊  
 創刊当初より完全フリーの多言語オンラインジャーナル  
 現地語から英語へ、英語から現地語への翻訳を掲載することで、大学研究者のみならず、NGO、ジャーナリズム、文化交流に携わる人々の相互理解を促進したいとの思いから創刊  
 学術書だけでなく一般書、映画などのレビューも行う

## II 国内の地域研究分野の学術雑誌



地域研究コンソーシアム  
JAPAN CONSORTIUM FOR AREA STUDIES

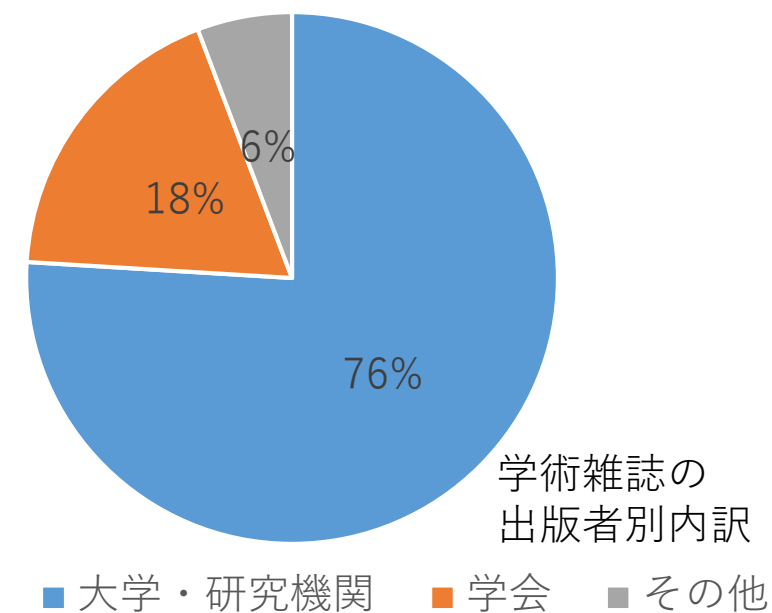
<http://www.jcas.jp/>

世界各地を対象とする多様な研究を結ぶとともに、研究と社会を結ぶため、地域研究に携わる様々な団体や個人が集まる組織

2004年に設立、大学・大学院、研究所・研究センター、学会、NGO/NPOなど、104の組織が加盟

### ★加盟組織による学術雑誌の刊行状況

	学術雑誌を持たず	学術雑誌を持つ	計
大学・研究機関	36	43	79
学会	1	18	19
その他 (NGO/NPOなど)	5	1	6
計	42	62	104

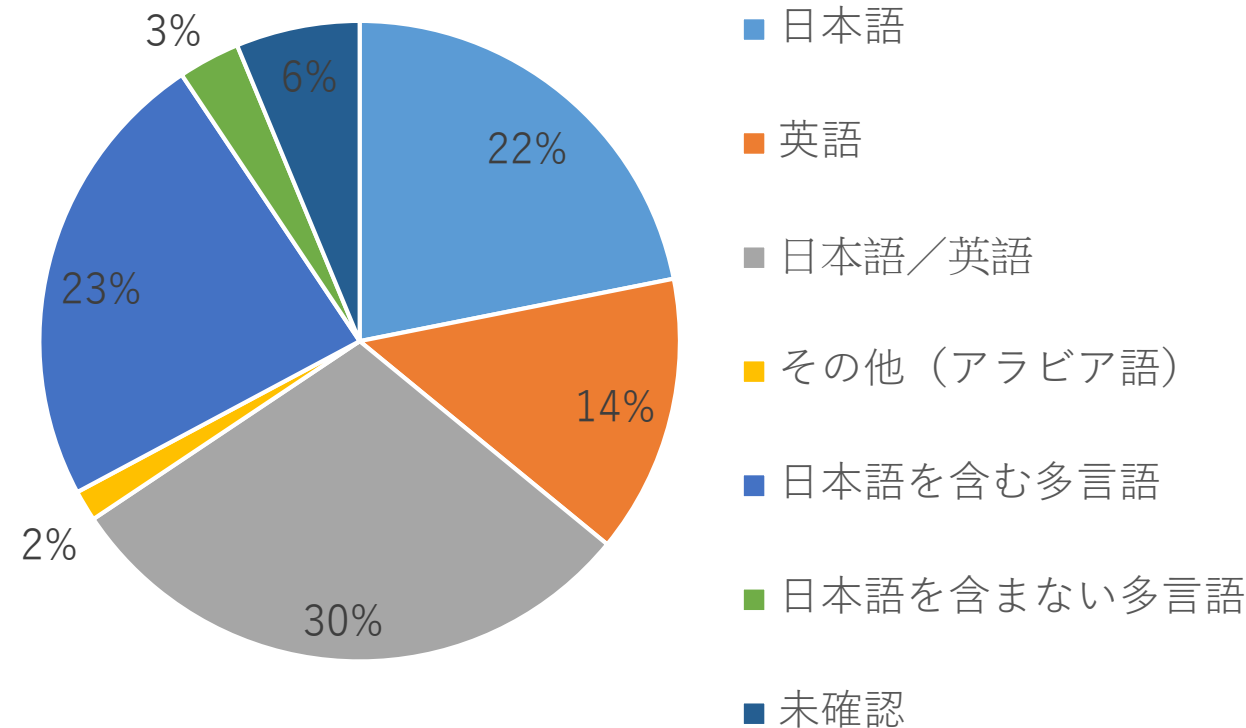


# 大学および研究機関による学術雑誌

43機関→人文社会学系 計64誌を刊行(自然科学系2誌は含まず)

## ★言語

言語	雑誌数
日本語	14
英語	9
日本語／英語	19
その他（アラビア語）	1
日本語を含む多言語	15
日本語を含まない多言語	2
未確認	4



★外部投稿の受付：24誌

★外部投稿を受付ける24誌のうち22誌が査読制度を明記

その他2誌は、「編集委員会によって審査」「必要に応じて外部査読へ」とそれぞれ記載

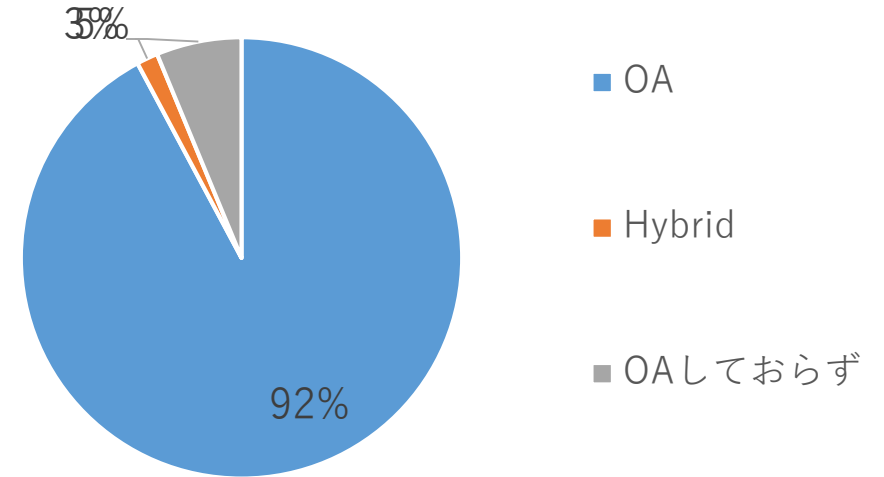
# 大学および研究機関による学術雑誌（人文社会学系 64誌）

## ★オープンアクセス化の現状

（オンライン上で無料で全文が読めると定義、エンバーゴがあるものも含める）

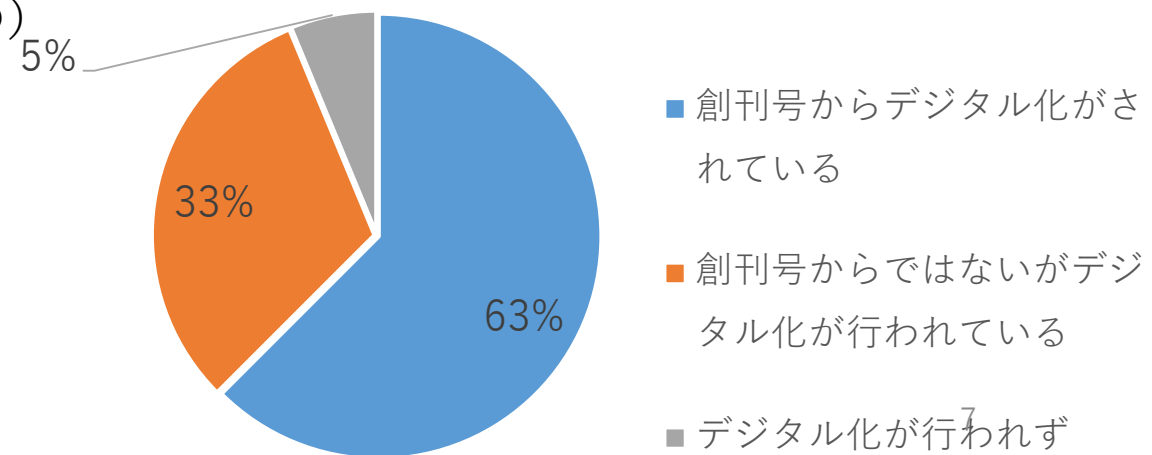
OA化の現状	雑誌数
OA	59
Hybrid	2*
OAしておらず	3

\*海外の出版社より出版される英文誌



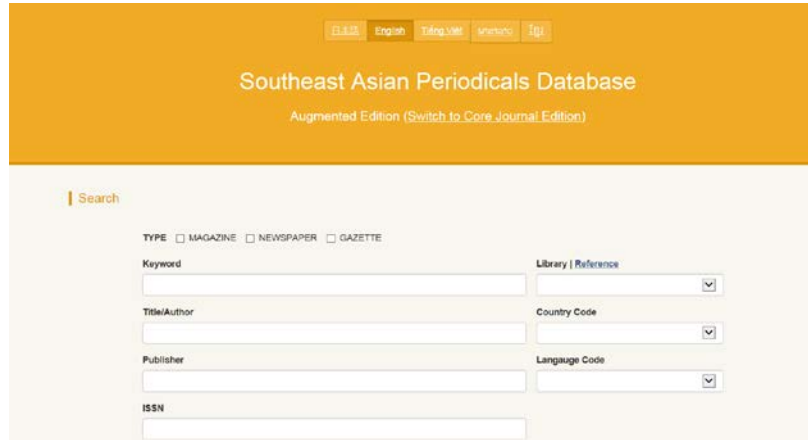
## ★デジタル化の現状（デジタル化され、フリーで公開中のもの）

デジタル化の現状	雑誌数
創刊号からデジタル化がされている	40
創刊号からすべてではないがデジタル化が行われている	21
デジタル化が行われず	3



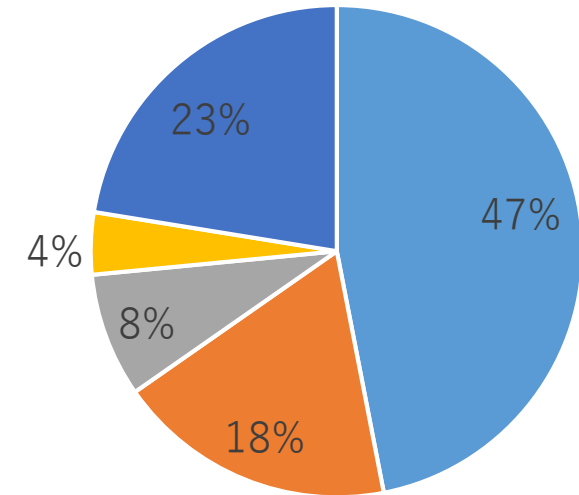
# III 海外の地域研究分野の雑誌の刊行状況は？

「東南アジア逐次刊行物総合目録データベース」 <https://info.cseas.kyoto-u.ac.jp/db/sealib/>  
東南アジア・日本以外で刊行された、東南アジアに関するメジャーな学術雑誌に限ってしてみるとー



★出版者による内訳（49誌 = すべてが人文社会系）

出版者	雑誌数
大学および研究所	23
学会	9
その他機関	4
雑誌	2
出版社	11

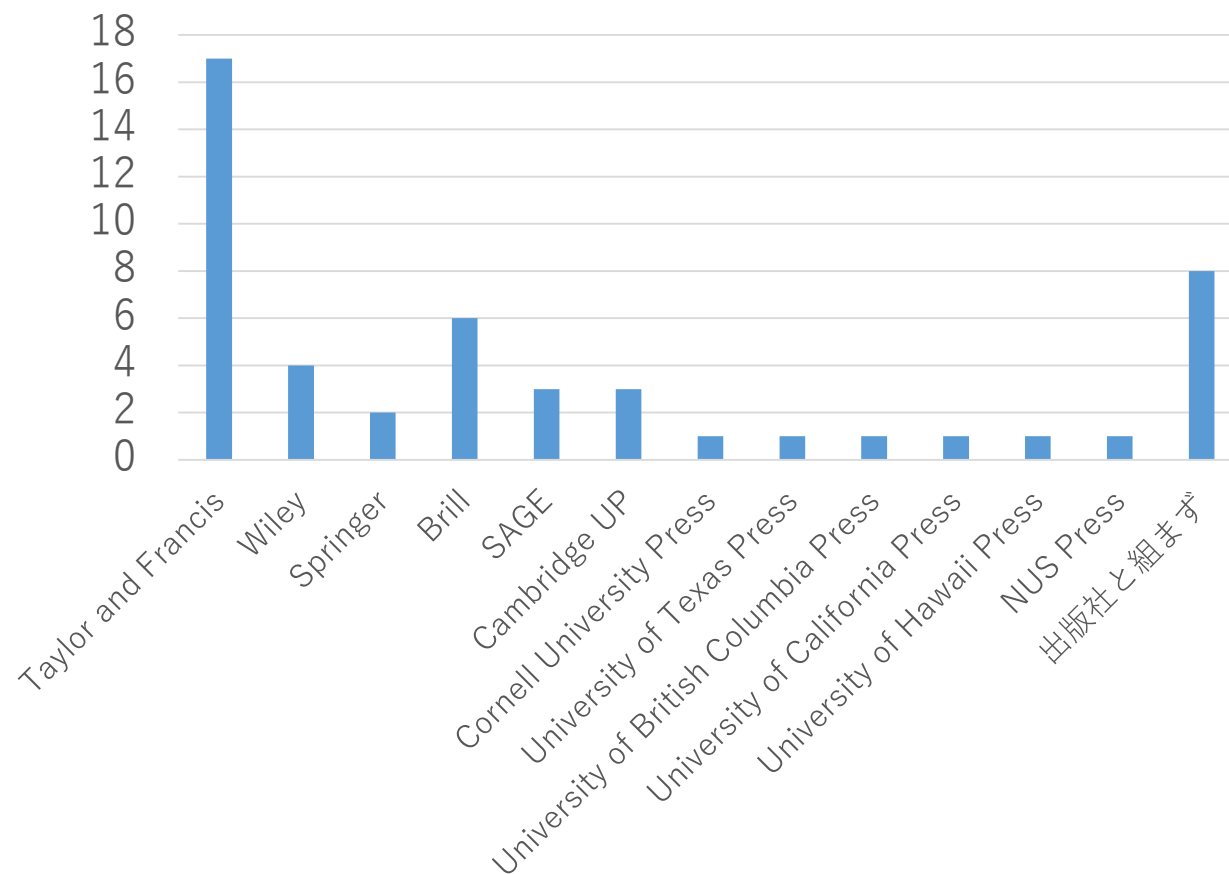


- 大学および研究所
- 学会
- その他機関
- 雑誌
- 出版社



★出版社とどの程度組んでいるのか（49誌 = 人文社会系）

出版社	雑誌数	%	2010年代に 出版社が変 更した数*
Taylor and Francis	17	35%	13(3)
Wiley	4	8%	2(2)
Springer	2	4%	1(1)
Brill	6	12%	1(1)
SAGE	3	6%	3
Cambridge UP	3	6%	1
Cornell University Press	1		1
University of Texas Press	1	2%	1
University of British Columbia Press	1	2%	1
University of California Press	1	2%	0
University of Hawaii Press	1	2%	0
NUS Press	1		1
出版社と組まず	8	16%	0
計	49		25



\*は合併、買収などに伴う出版社の変更

★OA化の現状（49誌＝人文社会系）

OA化の現状	雑誌数	%
fully OA	5	10.2%
Hybrid	21	42.9%
OAしておらず	23	46.9%

→ 雑誌のHPにオプションとしてOAが選択できるとあるが、OA化されている論文は少ない

★デジタル化の現状（49誌＝人文社会系）

デジタル化の現状	雑誌数	%
創刊号からデジタル化がされている	44	89.8%
創刊号からではないがデジタル化が行われている	4	8.1%
デジタル化が行われず*	1	2.0%

→ ただし、フリーアクセスは2誌のみ

\*紙媒体のみの出版か？

- 海外の学術誌は、地域研究に関する雑誌であっても、完全フリーなOA化には消極的。大手出版社と組むことが多く、既刊号のデジタル化が進む一方で、フリーアクセスとはなりにくい。
- 日本の学術誌は、完全フリーなOA化が進んでいる。デジタル化は、海外に比べると遅いが、OAが基本方針である。

文化の違いによるものか？

海外では採算の取れた、自立的な出版が基本

日本の学術誌の特徴

調査地に研究成果を還元したいとの思い

→さらに学界の域を超えた市民社会への研究成果の還元へ

真のオープンサイエンス = 我々の強み

# 川東南研でのOA出版を巡る議論

## 英文誌 *Southeast Asian Studies* がOAを選択した際の議論



# 自力でOA出版を続けてゆくために、何が必要か？（国際誌を目指す場合）

## ①知名度の向上に向けた取り組み

### 体制の整備

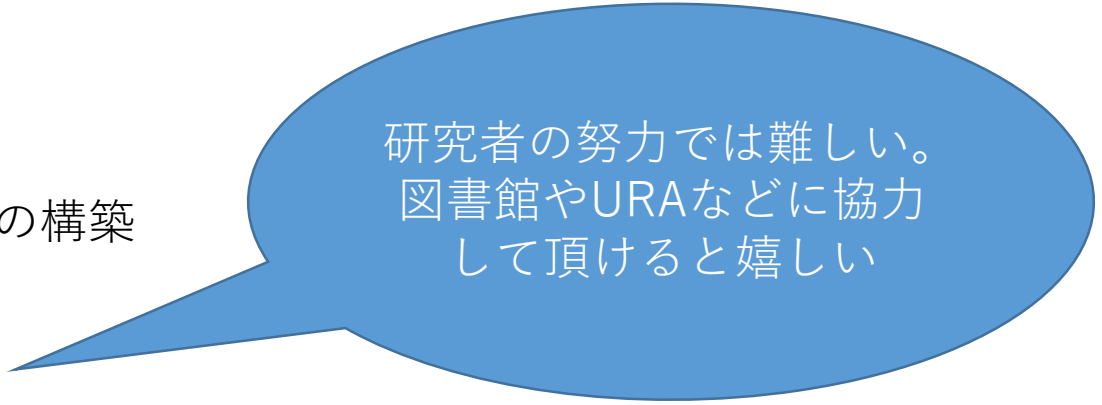
- International Advisory Boardの設置
- 有能なcopy-editorの確保
- 東南アジア圏の他の学術雑誌とMOUを締結

### 広報活動の強化

- 国際会議でのブースの設置、チラシの配布、編集委員のラウンドテーブルへの参加
- 他誌との広告の相互掲載
- メーリングリストの整備、Facebookの開始

### インフラの整備

- 独自ドメインを取得し、WordPressを用いたサイトの構築
- Google Analyticsの設置によるアクセス数の管理
- Abstracting and indexingの調査と申請



研究者の努力では難しい。  
図書館やURAなどに協力  
して頂けると嬉しい

少し具体的に…

Abstracting and indexingの調査と申請

Ex:

→登録すべきデータベースの選定

→英文契約書の作成

→申請後のフォロー

例えば

Scopusの申請時→ ethicsの準備で困った

EBSCO/ProQuestとの契約時→英文契約書の法務的な内容の理解に困った

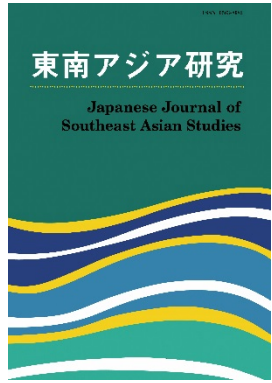
自力でOA出版を続けてゆくために、何が必要か？（国際誌を目指す場合）

## ②評価の在り方の再検討

アクセス数や引用数以外の評価――

たとえば、研究者以外からのアクセスの状況、研究の活かされ方など・・・  
真の意味でのオープンサイエンスの取組を評価してもらえないだろうか

この点は国際誌に限らない  
のでは



## 和文誌『東南アジア研究』のOA化を巡っては――

- 国立情報学研究所によるバックナンバーの電子化
- 京都大学附属図書館によるPDFファイルのOCRの実施  
→電子化、OA化への障害はなかった

### 現在の悩み

- IFの弊害 理系からの投稿論文を集めることが難しくなっている  
新しい雑誌の評価軸ができれば、流れは変わるかもしれない。
- 参考文献の表記方法：Scopusにおける評価を上げるためにはローマ字表記が必要との指摘あり。日本語文献でも！→読者の利便性は？

評価と読者の利便性の間での板挟み



## V 読者を考えたOA化に向けて——一つの提案

大学・研究機関刊行の学術雑誌に見る、投稿規定の公開状況

雑誌数	本文OA化が見られない雑誌数 (A)	(A)のうち投稿規定が公開中の雑誌数	本文OA化の方針がみられる雑誌数 (B)	割合	(B)のうち投稿規定が公開中の雑誌数	割合
4,084	862	78	3,222	78.9%	896	27.8%

(発表者調べ、第68回日本図書館情報学会での発表資料より)

OA化には積極的と思われる。では読者の利便性に沿った公開は進んでいるか？

## 紀要のOA化は進んでいると考える

- ・倉田敬子・上田修一「日本における学術雑誌電子化の状況と阻害要因：学会誌と大学紀要を対象とした郵送調査」『日本図書館情報学会春季研究集会発表論文集』2013との比較

## しかし、投稿規定の公開率は低い

- 本文の公開率と比べ、投稿規定の公開率は低い
- 学会誌と比べ投稿規定の公開率は低い（藤田節子「国内人文・社会科学系学会誌の投稿規定の分析Ⅰ」『情報管理』2007との比較）

## 公開していてもアクセス性や検索性が低い

- 投稿規定と本文が同じ場所で公開されていない
- 本誌全体をダウンロードして初めて読める
- リポジトリでの公開時、ファイル名に必ずしも投稿規定と明記されるわけではない
- 名称のバリエーションが多く、検索方法の見当を立てづらい、特に一般読者にはこうした情報の検索が難しい
- 出版者のHPで投稿規定が公開されていても情報更新が止まっている、制定日や改定日が記載されずどの時点まで適用可能かわからない

OA化には積極的だが、読者の利便性を十分に考慮した提供という点では不十分

(第68回日本図書館情報学会での発表資料より)

# 紀要編集者ネットワークのご紹介

<https://kiyo.cseas.kyoto-u.ac.jp>

## 『紀要』の可能性

### 紀要編集者ネットワーク キックオフセミナー

2017年 3月24日(金) 14-17時

京都大学 稲盛財団記念館 小会議室 I

- 14:00 趣旨説明
- 14:10 講演1 松林公蔵氏(京都大学)『ヒマラヤ学誌』編集長
- 14:30 講演2 立木康介氏(京都大学)『ZINBUN』編集委員長
- 14:50 講演3 澤井 努氏(京都大学)『いのちの未来』編集委員長
- 15:10 休憩
- 15:20 講演4 種村 剛氏/川本思心氏(北海道大学)『科学技術コミュニケーション』編集委員長/副編集委員長
- 15:40 講演5 近藤信彰氏/浅井万友美氏(東京外国語大学)『アジア・アフリカ言語文化研究』副編集長/編集事務担当
- 16:00 講演6 神谷俊郎氏(京都大学学術研究支援室URA) : 大学によるサポート事例紹介
- 16:20 ディスカッション
- 17:00 閉会の辞
- (\* 17:30 懇親会)

▶ 詳細・参加申込み \* 申込み締切 3月22日

京都大学学術研究支援室 K.U.research「参加できる研究」  
京都大学学際融合教育研究推進センター HP

紀要は、若手研究者や院生が研究成果を公表する重要な場です。  
紀要は、研究者が独自性の強い研究成果を世に問う貴重な場です。  
紀要は、部局や専攻がその研究スタイルを構築、伝承してゆく場です。

しかし、大手商業学術雑誌こそメインストリームとする風潮のなかで、紀要はその活躍の場を失いつつあります。

そうした危機感を一にする本学の研究者・編集実務者有志が、昨秋、「紀要編集者ネットワーク」を立ち上げました。学内・外の紀要編集者を広く結び、紀要の意義を考え、その活性化に向けた様々な取組みを行うことをめざします。本ネットワークのキックオフセミナーである今回のセミナーでは、学内・外から分野横断的に紀要編集者を招き、各誌の取り組みや課題、必要とするサポート体制などについて語っていただきます。またディスカッションでは、スピーカーおよび参加者ともに、紀要の可能性について考えます。

主催：紀要編集者ネットワーク  
(京都大学東南アジア地域研究研究所 設業成実)

協力：京都大学学際融合教育研究推進センター・学術研究支援室  
(分野横断プラットフォーム構築事業 研究大学強化促進事業「百家争鳴」プログラム)

## 第2回紀要編集者ネットワーク・セミナー

### 学術情報の国際発信力強化

——学術刊行物・紀要を中心に——

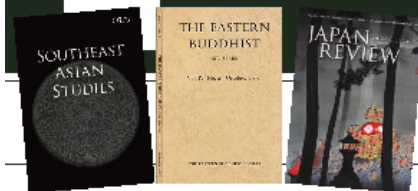
日時 2月26日(月) 14:30-16:50

場所 京都大学稲盛財団記念館3階 中会議室

- 14:30 開会
- 14:35-14:40 趣旨説明
- 14:40-15:00 話題提供1  
ジョン・ブリーン氏(国際日本文化研究センター、Japan Review誌エディター)
- 15:00-15:20 話題提供2  
ジョン・ロブレグリオ氏(オックスフォード・ブルックス大学、大谷大学東方仏教徒協会 The Eastern Buddhist誌エディター)
- 15:20-15:40 話題提供3  
富岡達治氏(京都大学附属図書館)
- 15:50-16:40 ディスカッション  
司会：ネイサンパデノック氏(京都大学東南アジア地域研究研究所 Southeast Asian Studies誌エディター)  
コメンテーター：鈴木哲也氏(京都大学学術出版会)
- 16:40-16:50 まとめ・閉会
- 16:50~ 交流会

言語：  
日本語

参加対象者：学術刊行物等の編集関係者、図書館員、学術出版関係者、URA、広報担当者など



「紀要編集者ネットワーク」では、大学や研究機関の刊行する学術刊行物等の編集関係者同士を、また編集関係者と図書館関係者、学術出版関係者、リサーチ・アドミニストレーター等と結び、業務上のノウハウの共有や意見交換を通じ、雑誌の活性化やその支援体制の充実へとつなげることを目指しています。

今回のセミナーでは、雑誌編集者および機関リポジトリの担当者をお招きし、学術情報の国際発信力強化に向けた取組や今後の展開、課題などについてお話しいただきます。またディスカッションでは、参加者とともに学術情報の国際発信のあり方や国際発信をめぐる留意点などについて考えます。

本セミナーでは、さまざまな形で雑誌編集に関わる方々の交流の場となればと考えております。閉会后、同室で簡単な交流会を予定しておりますので、是非ご参加ください。

- 参加受付フォーム: <https://goo.gl/seM4J>
- お問い合わせ: 設業成実(京都大学東南アジア地域研究研究所) [shitarai@cseas.kyoto-u.ac.jp](mailto:shitarai@cseas.kyoto-u.ac.jp)

主催 紀要編集者ネットワーク/科研究 基礎研究C「紀要を見直す―引用分析を通じた紀要の重要性の実証と発展のための具体的な提言」  
協力 研究大学強化促進事業「百家争鳴」プログラム/科研究 萌芽研究「実証的循環型コレクションモデルの創出による研究図書館の危機打開」